

# 尼と仏教——『日本靈異記』の世界から

田中貴子

## 一、景戒と『日本靈異記』

『日本靈異記』は、一応の完成の後も増補を重ね、弘仁十三年（八二二）に完結したといわれている。「平安」たけなわのような世にそむき、作者の景戒は、奈良に都があったころの話をはたすら書き継いで行ったのである。いくつかは出典のある説話だったが、多くは奈良の人々の間で伝えられていた古い話であった。なかでも、国分寺や国分尼寺がまだなかったころの地方の寺院の話が目立つ。そのなかには、もちろん、尼や尼寺にまつわる説話も散見される。

『靈異記』のなかで尼や尼寺が登場する説話は少なくない。いくつかは「聖武天皇の御世」の話であるとされているから、時代も特定できる。ひとまずそれらを列挙しておく、上巻第三十五縁、中巻第十一縁、中巻第八縁、中巻第十七縁、中巻第十九縁、中巻第二十三縁、そして、この稿の後半で詳細に見て行くことになる下巻第十九縁

の、全部で七話である。なかには、中巻第八縁のように、主人公の出自を示すために尼が出てくるものがあるが、そのほかは、奈良時代当時の尼や尼寺の様子をよく伝えていられると思われ。

ここで注意しておきたいのは、これら平城京の尼寺は官僧の寺である国分尼寺ができる前から奈良のあちこちに生まれたものだということである。つまり、奈良各地の尼たちは正式な戒を戒壇で受けたわけではないのだ。正式な受戒をせず、みずからの望みにしたがって尼となるとい、いわゆる「私度」、もし言葉が悪ければ「自度」であった。

『靈異記』作者の景戒もまた、半僧半俗の「私度」の僧だった。その共感のせいか、『靈異記』の尼に関する説話は、景戒の尼に対するあたたかなまなざしを以て描かれている。そこには、古代の尼がファミリーシューマン（家の巫女）の役割を残しているということも見て取れる。初期の尼が巫女的な性格を持っていることは、桜井徳太郎氏によってすでに指摘されている。巫女が神と人をつなぐ媒介者であるとするならば、尼は仏と人とを媒介する役割が期待されていたということになる。そのような原初的な古代の尼の姿を、景戒はいくつも書き残している。今回のお話では、前半には景戒が書き綴った奈良各地の尼寺の尼を紹介し、古代の尼寺の役割を探ることにし、後半では、『靈異記』の尼説話のなかでもっとも議論が集中している下巻第十九縁についていささか考察してみたいと思う。

## 二、尼のいろいろ

『日本靈異記』をひもといてゆくと、「聖武天皇の御世に」という時代設定を示す言葉から始まる説話が多いこと

に気づかされる。これは、景戒にとって「聖武天皇の御世」が一種の「聖代」を指しているためと思われる。聖武天皇は、後の光明皇后、娘の称徳とともに仏教をあつく守護し、奈良仏教の中心となる東大寺を建立した人物なので、景戒にとっても重要な意味を持っていたのだろう。先にあげた尼の登場する説話群のなかにも、聖武天皇の御世のこと、として語り始められるものはいくつかある。

『日本霊異記』に書き記された尼や尼寺は、国分尼寺に所属する官尼ではない。景戒と同じように「自度」し、大和や河内の国の片隅に寺をかまえた尼たちだった。奈良時代には珍しくはない尼の様相である。尼になった女性は、初めから尼になろうとして生まれてきた女性ばかりではないようだ。たとえば、「蛇婿入り」という民話と同じあらずじを持つ中巻第八縁では、蛇の嫁になることになった女性は、

置染臣鯛女は、奈良の京の富の尼寺の上座の尼・法迹が女なり。道の心もはらなりて、初姪を犯さず、常にねもころに菜を採り、一日かけずたてまつりて行基大徳につかへまつる。

(置染臣鯛女は、奈良の京の富尼寺の高位の尼・法迹の娘である。もっぱら法の道を志し、かつて一度も男に肌を許したことがない。常に菜をつんでは一日も欠かさず行基大徳の食事として奉った)

と、そのプロフィールが紹介されている。

ここで注目したいのは、この女性ではなく、母親の方である。母は、別に「隆福尼院」とも呼ばれる「富寺」の尼であり、かつ律令制による僧官の呼び名である「上座」という高い位についている人物であった。この「富寺」は行基の創建と伝えられる寺院である。

一生不犯であるはずの尼に子どもがいるというのは、現代人には少し奇異にうつるだろうが、この尼は在俗のときに結婚生活を送り、子どもをもうけたと考えられている。尼になるのに、性生活は絶つが俗人の間に産んだ子どもの存在は関係なかったということがうかがえる。

この尼のほかに、全部の戒を受けていない「沙弥尼」や、在俗のまま信心を行う「優婆夷」などの姿も描かれるが、そのいずれもが、官尼とは異なった活動をし、民のなかで敬われていたことがわかる。中巻第十九縁では、

利苺優婆夷は、河内国の人なり。姓は利苺村主なり。このゆゑにもちて字とす。ひととなり澄めるころあり。三宝をうやまひて常に心経をよみたもち、これをもちて業行とす。

(利苺優婆夷は河内国の人である。姓は利苺村主といい、これを以て通称としていた。その人物は澄明な心を持っており、三宝を敬って常に般若心経を讀誦し、それを修行としていた)

として、一人の在俗信者の語が語られている。この優婆夷は「心経」を讀誦する声がはなはだ美しく、道俗問わず人から敬愛の情を受けていた。彼女はある日突然死に、閻魔王庁に引き出されるのだが、その急死のてんまつは、閻魔王が噂の美しい読み声を聞きたかったということなのだ。そして優婆夷は三日後に蘇生し、体験を語るという話になっている。

在俗であっても信心を驚くし、精進すれば善報が与えられるという『日本靈異記』のテーマにのつとつた話である。たとえ出家していなくとも、「諸々の道俗につくしびらるる」(さまざまな人々から愛される)優婆夷の存在は、民間信仰者の鑑となつただろう。『日本靈異記』が彼女らに注ぐまなざしは、常にあたたかい。

こうした尼や女性信者の特徴は、国家のための仏教を奉ずるというのではなく、尼寺があるその一帯の道俗たちの間にいて民のために祈りを捧げ、修行をするということであろう。ここからは、先に触れたファミリーシャーマンとしての女性のイメージをうかがうことができよう。たとえば、中巻第十一縁の十一面観音悔過の話も、聖俗が入りまじった法会の様相を描いて、尼たちが民間に溶け込んでいたことを示している。

聖武天皇の御世に、紀伊国伊刀郡桑原の狭屋寺の尼等願をおこし、その寺に法事をもうけ、奈良の右京の薬師寺の僧・題恵禪師をむかへ、十一面観音につかへまつりて悔過す。

（聖武天皇の御世に、紀伊国伊刀郡桑原の狭屋寺の尼たちが発願して、その寺に法事をもうけ、奈良の右京の薬師寺の題恵を迎えて十一面観音に罪を告白する行事を行った）

この「狭屋寺」とは、葛城町佐野にある現・佐野廃寺といわれている。紀州にも、単なる地方寺院でも国分尼寺でもない尼寺があつたのである。

この説話は、悪しき心を持つ男が法会に参加していた妻を追って寺までやって来て、僧に耳を覆いたくなるような悪言を投げつけたため、悪報を受けて死んだ、という話である。その法会が寺中だけの行事ではなく、男女間わず、道俗問わない人々が集まっていたらしいことがうかがえ、興味深い。悪しき人の妻は、日頃から篤く仏を信仰していたが、夫は三宝を敬わず、法会からひきずつて帰つて来た妻とそのまま性交するという仏も恐れぬ行為をするが、結局アリによつて性器が食われ死んでしまうのである。

今私が注意したいのは、「私度」の尼たちがかなりの規模の尼寺を運営しており、そこに都の大寺である薬師寺の

僧を招いていることである。薬師寺の僧は官僧として正式な受戒を経ているが、それが「私度」尼の寺院を避けたりさげすんだりしていないのは、この時期、かなりの数の尼寺が各地に興り、それなりの活動を行っていたからではないだろうか。国分寺の総元締めである東大寺でも、そうした尼寺の存在は無視できなかったと考えられよう。

以上のことから、「聖武天皇の御世」に存在した尼や尼寺の役割は意外と大きいものであることが確認できた。ただし、道俗男女を拒まずすべてを受け入れる尼寺や尼たちの活躍は、景戒が最終的に『日本霊異記』の筆を描いた弘仁十三年（八三二）には、すでにかんりの数が消え去っていたらしい。それは、一つの「古代」の消滅を表すものでもあった。その後、尼がこのように文学や歴史の表面に浮かび上がってくるには、相当な年数が必要だったのである。

### 三、盗まれた仏さま

『日本霊異記』に見える尼や尼寺の説話の中には、共通点を持つものがいくつかみられる。それは、寺で大切にしていた本尊や重宝が盗まれる、という事件を描いた話である。

盗難にあったのは、一つは、仏を写し六道を描きこんだ画、もう一つは六体の観音像、そして金銅の菩薩像である。いずれも、仏像や仏画があやしき現象を起こして人に居場所を知らしめ、尼たちは再びそれを得られた奇瑞に感動するという話となっているが、それがありきたりなパターンになっていないところに景戒の筆の巧みさがあらわれている。この三話を細かく読んでみると、行間から今はなき「古代」の、一種土俗的な雰囲気立ち上ってくるように、私は感じる。

まず、上巻第三十五縁から見て行くことにしよう。河内国によく修行に励んでいる沙弥尼がいた。平群の山寺に住み、信心のともがらで講を作り、仏像を絵に描き、そこに六道（地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人道、天道）の図もしるした。尼はそれを供養した後、その山寺に置いて人々に絵解きをした。

ところが、山寺に安置されていた絵像は、あるとき誰かに盗まれてしまい、尼はたいそう泣き悲しんだがもとへは戻らなかつた。しかたなく、なくなつてしまつた仏画の供養のために、捕らえられた生き物を放つ放生という功德を施そうと、尼は難波の市へ向かつた。市の雑踏をくぐつて行くと、背中に負う形の箱が樹上にあつて、いろいろな生き物の鳴き声があるのでこれを買つて放生しようと売り主にたずねたところ、「これは生き物ではない」という返事。

尼が、「なんとか売ってもらえまいか」と交渉するうち、市の人々が「なんだ、どうした」と寄つて来、「その箱を開けてみよ」と口々に言つたので、売り主は箱を置いたまま逃げてしまつた。あやしむ人々が開けてみると、そこには盗まれたくだんの絵像があつたのだつた。尼はおおいに喜び、市の人々も集まつてきて、「めずらしい、喜ばしい」とほめた。絵像は再び山寺に安置され、道、俗に敬われたのであつた。

この短い話には、河内、大和の平群、そして難波という古代の地名が散りばめられ、それだけでも『日本霊異記』成立以前の混沌とした「ふるきものがたり」の雰囲気醸し出している。また、盗まれた絵像が発見されるのが市という場であることも、この話の「古さ」を物語つているように思える。山から、海から、物が、人が流入する市、売り手と買い手とのたまさかの出会い。そんななかで聖なるものが発見されるという奇瑞。この市のざわめきが、まるで手にとるように伝わってくる。

絵像が発したと思われる「生き物の鳴き声」を尼が聞き取ることができた不思議は、この尼がシャーマンとして

の性格を持つていたことを示しているだろう。しかも、絵像の入った箱は樹上にあつたというが、これなどは明恵上人が樹上で安座している有名な絵を思い起こさせる。「聖なるもの」が樹上からあらわれる、というのは、いかにも神秘的である。

しかしながら、仏と六道絵とが描かれた絵がどうして生き物の声を発したのかという点は謎である。もちろん、放生のために生き物を探していた尼に注意を呼びかけるため、という合理的説明はつくだろう。だが、私はそこに何らかのプリミティブなイメージを読みとつてみたいと空想している。

ちなみに、畏友である日本史学者・西山克氏は、その絵像が釈迦の死を描く「涅槃図」ではなかったか、という解釈を語ってくれた。涅槃図には、釈迦の死を悲しむ多くの動物たちが描き込まれているが、生き物の声というのは彼らの泣き叫ぶ声だったのでないか、というのである。確証はないが、私には魅力的な説に思える。

#### 四、古代巫女の面影

仏の声を聞き分けることができるこの話の沙弥尼には、失われた濃密な「古代」の巫女のイメージが重なり合っている。仏と人とを結ぶ者として、尼は選ばれた聖者となったのだ。こうした尼の姿は、中巻第十七縁、同巻第二十三縁にも連なつてゆくものと思われる。この二話では特定の尼が主人公となるわけではないが、いずれも、盗まれた仏像がさまざまな不思議を起こして尼たちに所在を知らせるといふ展開となっている。

中巻第十七縁は、先の沙弥尼が住んでいた平群にある岡本の尼寺（現在の法起寺）にあつた十二体の観音菩薩像のうち、六体が盗まれた次第を記すものである。時はやはり「聖武天皇の世」。詳細は省くが、平群郡の駅の近くに

ある池から金色の小指が突き出ているのを見つけた牛飼が人に告げたところ、それを伝え聞いた諸人が寺の尼に知らせたのである。引き上げられた像は金がはげ落ちていた。尼たちは像を囲んで悲しみ嘆いたが、御興に像を乗せて寺へ運び、もとの通りに安置した。集まった遣俗の人々は、「溶かして銭にしようとして失敗したのだろう」と噂しあった。

岡本の尼寺とは、かつて聖徳太子が尼寺になした寺院である。平群という場所は、先の上巻第三十五縁と同じく、「古代」を色濃く残しているところといえよう。その尼たちも、「自度」の尼だったに違いないが、尼寺では本尊を守って修行する静かな毎日があったと思われる。変わり果てた仏像を尼たちが囲って泣く姿には、唐突なようだが朝鮮半島の葬式につきものの「泣き女」を重ねてみたくなる。

興味深いことに、尼たちの、

我れ尊き像を失ひ、昼夜恋ひ奉る。今、邂逅に逢ひたてまつる。

(私たちはお像を失い、昼となく夜となく恋し申し上げました。今、偶然にお逢い申し上げました)

という言葉は、上巻第三十五縁でも、

吾れ先にこの像を失ひ、昼夜恋奉る。今邂逅に遇ひたてまつる。ああ、慶しきかな。

(私は以前この像を失って、夜となく昼となく恋し申し上げました。今、偶然にお逢い申し上げました。ああ、なんとよろこばしいこと)

という尼の言葉と非常に似ている。何か典拠となる文献があるのかも知れないが、仏の姿を「恋奉る」というのは、尋常な表現ではない。まるで夫や恋人が帰ってきたかのような感を受ける。だが、考えてみると、これらの話の尼たちは世俗との契りを絶って寺で修行三昧の生活を送っているのだから、「仏さまが恋人」という環境にあるのだ。「恋」という文字の生々しさに驚くのは近代人のさかしらだろう。尼たちは全身全霊をもって仏に「恋」をしている。それが修行でもある。

もう一つ興味深い点は、仏画や仏像が本来の場へ戻った後、

道俗より敬ふ。(出家人も俗人も寄り合つて仏を敬ふ) 上巻第三十五縁

道俗集りて言はく、(出家人も俗人も集まつて言うことには) 中巻第十七縁

というぐあいに、寺に「道俗」が集まって来ていることである。これは、尼寺とはいえ俗人を排除する厳しい寺ではなく、仏を拝みに参詣したり、人生相談に来たり、あるいは絵解きを聞きに来たりする人々を受け入れる寺だったことを意味している。このようなことは、国家鎮護のための仏教を標榜する国分寺や国分尼寺では考えられないことである。

先には、古代の尼が仏と人との媒介者だったと述べたが、この「仏像盗難顛末記」にも同じことを感じ取る。たとえば、想像してもらいたい。池の水面に突き出た小さい金の指。尼の身も世もあらぬていの嘆き声。そして、

それを見守る道俗の人々。それぞれのシーンが、まるで一つの世界を作っているかのようだ。

中巻第二十三縁にも、「聖武天皇の御世」の出来事として、葛木の尼寺の前の原で、盗まれた弥勒菩薩像が発見されるという話が語られている。これはほんの数行の短い説話であるが、尼寺の仏像が盗まれて、声を発して助けられるという、上巻第三十五縁と似通ったものである。

これらの説話に描かれた尼たちは、けっして正史に登場することのない人々である。沙弥尼が「その姓名はわからない」と記されるように、個々の名前をとどめることなどない。しかし、奈良時代、大和国の周辺に尼たちをめぐる一つの事件（奇瑞、といった方がよいだろうか）がたしかにあったことを、景戒は書きとどめておきたかったのだと思う。時がうつろい、尼たちのいた寺も荒廃していった「今」だからこそ――。

## 五、女でない女

さて、『日本書紀』に出てくる尼のなかで、もっとも著名で、しかしその存在について諸説が多いのが、後に舎利菩薩と呼ばれた女子である。下巻第十九縁に記された彼女の人生は、卵のようなものから生まれたという不思議な出来事から始まる。研究者によって解釈がまちまちなので、少し詳細に見て行くために、長くなるがまずはあらずじで説話の全体を見渡しておきたい。

肥後国八代郡豊服の里の人、豊服広公の妻が、一つに肉のかたまりを出産した。それは鳥の卵のような形だった。夫婦はゆゆしきことと思ひ、竹の入れ物に入れ、山の石のなかに隠して置いた。

ところが、七日たつて肉のかたまりの殻が破れて女の子があらわれた。夫婦は子どもに乳を飲ませて育てた。女の子は八ヶ月を過ぎるころに急に体が成長したが、頭と首とがくっついており、あごがなかった。身長も三尺五寸ほどできわめて小柄だった。

女の子は生まれつき利発で、七歳にならないうちに法華経、八十華嚴経を転読した。そしてついに出家したいと願い、頭の髪をそり、袈裟を着して仏法を勉強した。誰一人として尼になった女の子の教えを信じない者はなかった。経を読む声が豊かで、人々は感動した。

ところが、この尼は「女であつて女でない」体をしていた。女性の陰がないので結婚はせず、その箇所にはただ尿を出す穴だけがあつたのである。愚かな俗人たちは、彼女を嘲笑して「猿聖」と呼んだ。

そのころ、豊前国の大神寺の二人の僧が、尼をねたんで「おまえは異端者だ」と言つてあざけることがあつたが、そのとき、天から守護神が降りてきて僧たちを突こうとしたので、僧は恐れて死んでしまった。

また、大安寺の高僧である戒明が、宝亀七、八年（七七六―七七七）のころに、肥前国佐賀郡で行われた安居会に招かれ、八十華嚴経の講義を行ったとき、尼も欠かさず多くの人々に交じつて聞きに訪れた。そのとき講師は、「どこの尼だ、みだりがわしくまじつているのは」と尼を責めた。尼は答えて、「仏さまは一切衆生のために教えを広められました。何が理由で私は責められないといけないのでしょうか」と言つた。そして、尼が経典の詩句（偈）の形式で質問したとき、講師は同じように返答できなかつた。そこで列席していたおおぜいの僧が不思議に思い、尼に質問をあびせたが、尼は最後まで答え続けて負けることがなかつた。

こうして人々は尼が人間の姿に化してあらわれた聖者であると知り、名を「舍利菩薩」とつけた。僧俗みなこの尼に帰依し、指導者としてあおいだ。

原文ではこの後に、釈迦が在世のとき卵から生まれた子どもが出家して悟りを得た話が付け加わっているが、天竺（インド）にも由来することを強調したための付加なので、ここでは省くことにする。

さて、この説話には先にも述べたように、いろいろな問題点がある。なぜ肉のかたまりのようなものから生まれただか、なぜ女性としての器官が備わっていなかったのか、などといった疑問もあるだろう。前者は、ふつうの人間ではない特異な誕生をした尼が人間を越えた聖なる者であることを示すためであり、後者は、生まれつき一生不犯であることをあらわしていると思われる。この尼は、容貌の怪異さや成長の速さなど、人と異なる面をいくつも持っているが、それらも尼を聖別するためのなのである。

この話でこれまでとくに問題とされている箇所がある。それは、尼が大安寺の戒明の安居会で責められたというところである。ここは重要なので、代表的な訓みを引用しておこう。

「いづくの尼ぞ、濫しく交るは」（日本古典文学全集）

「何の尼か濫しく交る」（新日本古典文学大系）

私のあらすじでは、「濫しく交る」という部分をあえて訳さなかった。「濫し」の訳し方によって、この戒明の言葉の意味が異なってしまうからである。「濫し」を手近な辞書で引くと、

秩序や規律、作法に反するさま

整然としていないさま、乱雑であるさま

思慮、分別がないさま、乱暴なさま（日本国語大辞典第二版）

という意味があがっている。いったい、尼のどのような点が「濫しく交る」として非難されなければならないのだらう。

ここで、今までの諸説を見ることにしよう。日本古典文学大系をはじめとする多数の注釈書では、「女であることがとがめられた」という説をとっている。しかし、尼とは女性性を忌避した存在であって、「女」と決めつけられるのはおかしいし、舍利菩薩は女性性を生来持たない身なので、「女」と呼ぶのはふさわしくない。ちなみに、もともと新しい『日本霊異記』の注釈書である新日本古典文学大系は、「女子の容貌や体型に関する書か、自度であることに關しての書か、不明」として明言を避けている。

それらの説に対して異論を唱えたのが西口順子氏である。氏は、「尼であるということが叱責の理由」という説を述べている。その理由は、尼であろうとも男女が同席するのはよくない、という宗教上の理由であると氏は説明をしている。しかし、吉田一彦氏が反論するように、尼と僧、あるいは俗人とが法会の際に同席する場面は『日本霊異記』にもいくつか見出されているので、これもしたがいがたい。

吉田氏の説は、「異形の民間信仰者、非正統的仏教者だから」というものである。氏は舍利菩薩の女性性についてはとくに言及しておらず、「そこに五障とか変成男子といった大乘仏教の女性差別の思想が全く見えない」という理由で、舍利菩薩が忌避された原因は女性であることとは別だと考えている。

また、永藤靖氏は、

おそらくこれは尼の肉体の異常性、外見的な醜悪性のためである。そうしたステイグマを仏教は差別して許さなかつたのである。

と述べている。永藤氏と吉田氏とは一見すると似ているようだが、吉田氏が舍利菩薩の「非仏教性」を主張するのに対して、永藤氏は彼女の肉体が仏教より高次の聖性をあらわすものとして肯定的に評価している違いがある。

こうして見ても諸説流動的であるが、私の思うところ、吉田氏のように女性性と切り離れた説には無理があるろう。たしかに舍利菩薩は性を超越した存在であるが、いくら女陰がなくても、尼になっても、女性と生まれながらにはけっして僧と同等にはなり得ないのである。その点で、私は西口氏の説にかたむいている。だが、男女同席が問題だったのではなく、外見が醜悪で人とおおいに異なっていたことがいちばんの原因だったのではないかと考える。

なぜかという点、仏教の因果論では、端正な容貌は前世における善行を、醜悪な容貌は前世での悪行を示す指標であるからだ。そして、舍利菩薩は通常の人間との差があまりに大きかった。その姿を見た講師は、悪行の因果を示す（ように思えた）舍利菩薩に叱責の言葉を浴びせかけたのではないだろうか。

それというのも、この下巻第十九縁を出典として平安時代の『三宝絵』、『法華験記』、鎌倉時代の『元亨釈書』に舍利菩薩の話がおさめられているのだが、そのいずれもが彼女の容貌が奇怪であったとは記していないからである。これについては、節を改めて述べることにしよう。

## 六、舍利菩薩の役目

舍利菩薩の肉体の特異性については、さまざまな解釈がなされている。ここで少し紹介しておこう。守屋俊彦氏は、『日本霊異記の世界』で次のように述べている。

ここでは、肉体的に性的不能者であったので結婚しなかったように書かれているが、本来はそのような理由からではあるまい。彼女が巫女だったからである。

これは、本稿の最初のあたりで示しておいたファミリーシャーマンとしての尼、という特性を言うものである。巫女は仕える神と「神婚」しているので、性的にはニュートラルでなくてはならない。したがって、女性器がないことは彼女の巫女的性格をあらわしているというのである。

たしかに、男と交わろうにもその器官がない「女性」は、生まれながらに巫女としての役割を持つのかも知れない。このことを、もつと難しい表現と論理で論じたのが永藤靖氏である。

あるいは欠陥であることにおいて対社会的には負のステイグマを刻印され、それはケガレのひとつとして認定される。(略)しかし、それは、仏教という共同性を獲得することで、すなわち出家、尼になることにおいてこのステイグマは逆転する。(略)つまり彼女は自己の〈性〉を否定することで、負から正へとステイグマを逆転

させ得たのである。

舍利菩薩の「無心性」がステイグマ、つまり「聖なる傷跡」というやや難解な表現になっているが、氏のいわんとするのは、「シャーマンから尼へ」というみちすじだと思われる。仏教という大きな外来宗教に古代的な巫女が取り込まれることよって、仏の教えを守る尊い尼に変身するのである。

守屋氏、永藤氏の説はともに納得できるものであるが、私にとつての問題は、女性器の有無というよりも舍利菩薩の「異形」にある。頭と首とがくっついてあごがないという肉体的特徴はいったい何をあらわしているのだろうか。

前節で触れたように、これは通常では前世での悪行が生まれ変わった姿にあらわされていると読むことができる。こつしたことは例がないわけではない。同じ『日本霊異記』でも、たとえば上巻第十九縁「法華経の品を読む人をあざけりて現に口ゆがみ悪しき報を得る縁」には、「自度」の沙弥が法華経を読みながら物乞いをする姿を見てそれをあざけり、自分の口をねじまげて沙弥の口真似をして笑った僧が、ゆがめた口がもとに戻らない現世での悪報を受ける、という説話が見える。どんなにへたくそでも、法華経を読むという行為は尊いものであるから、それを嘲笑することは悪行とされたのだ。この語の最後には、「法華経を信ずる者を軽蔑しあざけつて笑う者があれば、現世においてたちまち歯が欠けてばらばらになり、唇は醜く、鼻は平らに、手足はねじれ、目はやぶにらみとなろう」という法華経の普賢勧発品の文句が引用されており、容貌や肉体の不具合は悪行という「因」による「果」なのだという思想があったことがわかる。

法華経に示された「果」にはいわゆる身体障害が含まれており、現代の視点からすればやや疑問がないわけでは

ない。ましてや、「鼻が低い」などというのは本人の責任ではない。しかし、それらが『日本霊異記』成立当時、「悪しき容貌」と考えられていたことは間違いないのである。舍利菩薩のように「あごがない」という容貌の不具合を「悪因」のむくいとする経典は管見のところ見受けないが、これは当時としては明らかかな「悪しき容貌」として認識すべきものであったと私は思う。

『日本霊異記』のこの語は、時代を経て『三宝絵』中巻四、『法華験記』下巻九十八、『元亨釈書』卷十八に引き継がれてゆくが、そこには、あごなしの猿聖などは描かれていないのである。たとえば、『霊異記』に出づ」としてその書承関係を明らかにしている『三宝絵』は、「猿聖」という呼び名は受け継いだものの、

その形人に勝れて、

として舍利菩薩を異形の者と記してはいないのだ。続く『法華験記』では、「猿聖」という言葉がなくなり、舍利菩薩の容貌は次のように述べられている。

「面貌端正にして、見る者寵愛す。（容貌が美しく、見る者は彼女をいつくしんだ）」

鎌倉時代の『元亨釈書』でも、

顔兒端正。

というふうに、よく似た表現がなされている。

この三書には、女性器を持たないことはちゃんと記されてあるが、『日本霊異記』との最大の違いは舍利菩薩が美形で、しかも『法華験記』では「人々から愛された」とまで描かれていることである。ちなみに、『法華験記』には、講師が「外道にして仏弟子にあらず」と舍利菩薩に言う場面があるが、これは『日本霊異記』での異形を「面貌端正」と言い換えたため、舍利菩薩を叱責する理由が必要だったからだろう。

こうした変化は、舍利菩薩が講師との問答に勝ち人々から信仰されたという結末と、「異形は悪報のしるし」という思想との間に疑問を持った誰かが行ったのではないだろうか。「仏法の正しい行いをする者には悪報はなく、したがって外面は善報のあかしである美形であるはず」という解釈がはたらいっているのである。これこそが「古代」と平安時代との断層というべきであろう。

舍利菩薩は、「古代」世界を舞台とする『日本霊異記』では、「悪報ゆえの異形」を持ったゆえに講師から叱責されるが、その聖なる力は劣ることがなかった。しかし、平安時代になると「善Ⅱ美」という図式ができあがっていったのであろう。そこに描かれる舍利菩薩は、「異形ながらも人々からうやまわれる巫女的人物」というプリミティブな姿から、「正しい教えを行う美形の生き菩薩」という平安仏教好みの尼姿になったのである。それはいうなれば滅び行く「古代」の風景を一掃するような、平安仏教の大きな力をあらわしてやまないものであった。

こうして尼たちは次第に変化を始める。地方の尼寺は荒廃し、僧寺に変わっていった。仏の声を聞くことのできる巫女的な尼、「自度」の尼たちの居場所はなくなってゆき、いつしか淘汰されていったのである。

【付記】

本稿は、公開講演の内容を田中貴子先生が論文形式に改められたものです（編集担当者）。